博物館における文化体験学習の性格

―さきたま古代体験の実践を手掛かりにして―

向井隆盛

1．はじめに

現在、日本の多くの博物館が、来館者に対して文化体験学習の場を提供している。これは、博物館利用の普及活動の一環である。

学校週５日制の施行、教育基本法の改正以後、博物館等によって行われる社会教育活動は、一層重要となった。人生において物心両面の豊かさが求められる今日、価値ある体験活動を提供することが、博物館等社会教育施設に求められている。このような教育改革の動向を受けて、博物館では調査・研究、展示といった従来の活動に加え、博物館利用の普及活動の充実を図ってきた。博物館等における普及活動の中心の１つが、体験学習の提供である。

博物館等における体験学習では、それぞれの館の特長に応じて、自然体験活動や文化体験活動が行われている。本稿では博物館等における文化体験活動に焦点をしぼり、その性格の一端を論ずる。その際、埼玉県立さきたま史跡の博物館で行われている文化体験活動「さきたま古代体験」の取り組みをとおして、具体的に述べる。

2．博物館等における文化体験活動

博物館等における文化体験活動には、製作体験、鑑賞体験、実技体験などがある。製作体験は、組紐づくり体験や藍染め体験など、伝統的な技術を体験しながら物づくりに取り組む活動である。鑑賞体験は、鑑賞のポイント等について説明を受けながら、絵画や彫刻など作品に対して積極的な鑑賞を行う活動である。実技体験は、指導を受けながら能や狂言などの身体動作を体験する活動である。何れも、活動をとおして、利用者に歴史や文化に対する理解を深めてもらうことがねらいである。

それぞれの博物館は、調査研究の対象の価値を、利用者によりよい形で理解してもらうことを普及活動の使命としている。例えば、地域の民俗を調査研究する博物館があるとする。その地域で行われてきた伝統的な物作りの中から、藍染めの価値について利用者に伝えることは、その使命を果たすことにつながる。しかし、藍染めの全ての工程を体験してもらうことは、時間の確保の面でも、費用・人材の確保の面でも難しい。そこで、最も藍染めの価値をわかりやすく利用者に伝えられる工程を抽出し、提供することとなる。博物館等が提供する文化体験活動は、時間、場所、費用、人材確保などの様々な制約を受けることから、パッケージ型で提供されることが多い。パッケージ型とは、一定の時間内に、対象とする年齢層の利用者が適切な費用で体験を行い、文化的価値に触れて有意義な時間を過ごせるように組まれた完結型のプログラムである。また、同じ種類の体験活動でも、初級・中級・上級などの習熟の段階を設けて、リピーターの参加を促す取り組みもなされてきている。博物館では様々な角度から検討し、他館の取り組みも参考にしながら、文化体験活動の充実に努めている。

3.「さきたま古代体験」の概要

さきたま史跡の博物館では、平成17年より文化体験学習「さきたま古代体験」の開発を行ってきた。これは、昭和59年に始まる「さきたま風土記の丘教室」より連なる文化体験学習を引き継ぐものである。初期の「さきたま風土記の丘教室」では、古墳公園の広場を利用して、埴輪作りが行われた。利用者は、古墳に囲まれた会場で、埴輪作りをとおして古代の人々の思いや願いについて追体験を試みることができた。現在は、「さきたま古代体験」へと事業が引き継がれ、まが玉、ガラス玉、縄文・弥生土器、貝輪、土偶、古代の布、土鈴・土笛の製作体験や、火おこし体験、古代米の栽培体験、古代の服の着装体験などが行われている。さきたま資料館・さきたま史跡の博物館の文化体験学習の開発は、博物館学芸員と学校の教員が連携して行われた経緯がある。これまで、学校の教員がさきたま資料館・さきたま史跡の博物館に主査や担当課長として赴任した時期は、3回である。博物館の普及活動が大きな転換期を迎える都度、博物館と学校の連携が強化されてきたといえる。

さきたま古代体験は、考古学の研究成果に基づき、古代の物作りの工程の一部を体験できるプログラムとなっている。利用者が、古墳の副葬品や埴輪・土器などの文化財に親しみ、古代の人々の生活について理解を深めたり、関心をもったりすることをねらいとしている。

さきたま古代体験の中でも、長期間継続して行われてきたプログラムに、「まが玉づくり」がある。埼玉古墳群の中心的な前方後円墳である稲荷山古墳からは、国宝のヒスイの勾玉が出土している。このプログラムでは、国宝の勾玉と同じ大きさ・形の勾玉を、滑石で製作する。古墳の代表的な副葬品である勾玉に興味をもってもらい、埼玉古墳群と郷土埼玉の歴史への理解と愛情を育てることがねらいである。

「まが玉づくり」の開発は、渡邉勤氏が、教員として初めてさきたま資料館に赴任した平成7年頃から行われてきている（渡邉1996）。平成7年に初めてまが玉づくり体験が行われたことが、渡邉氏の報告に記されている。193名の親子が参加し、勾玉に関する講義を受けた後、まが玉づくりを行った。当時のまが玉づくりは、紙やすりで削り、磨き、ドリルで孔を開け、紐を通し、ニスを塗り、首飾りとするという手順で行われた。これは、昭和59年より行われてきた「さきたま風土記の丘教室」の一環であった。また、平成8年には、まが玉づくりの出前授業を5校の学校で実施している。その後、まが玉づくりは、田村宜也氏、関口孝明氏の実践を経て、平成18年に開設された「さきたま体験工房」の事業へと引き継がれた。

平成25年に赴任した西田真吾氏は、ボランティアスタッフの更新に伴い、現在行われている指導方法を確立した。現在行われているまが玉づくりの基本的なプログラムは、このときに定められたものである。

現在、まが玉づくり体験は、1日4回、1回80分の時間設定で、博物館の開館日には毎日行われている。定員は40名である。学校団体等の参加も合わせると、平成25年度には、年間で5,127人の方が、まが玉づくりを行った。今年度も、引き続き多くの参加者があり、夏休みなどは連日満員の状態が続いた。

4.「まが玉づくり」の内容と方法

(1)「まが玉づくり」の内容

古代の勾玉についての詳細な研究は、河村好光氏（石川県立金沢商業高等学校教諭）によってなされている(河村2010)。河村氏は、本州諸島における勾玉の用法を「一連をなして身に纏う」としている。また、ヒスイ勾玉の出自は縄文玉にあり、碧玉管玉は大陸文化に連なると指摘している。ヒスイ勾玉が碧玉管玉に挟まれた一連の装身具の出土例は多く、埴輪にもその様子が見られる。さきたま史跡の博物館のまが玉づくり体験では、勾玉１つと管玉１つを組み合わせて、首飾りとしている。

また、古墳時代の勾玉作りの工程について、河村氏はつぎのように述べている。

> 厚さ４～５㎜のカマボコ形の板状研磨品をまず作る。この腹部を抉り、背部を円弧状に磨いて概略の形を整え、穿孔後に仕上げ研磨を施して完成品とする。

まが玉づくり体験では、板状研磨品の腹部を抉り背部を円弧に近くした状態で材料を提供する。参加者は、穿孔、仕上げ研磨の順に作成を行っている。穿孔の方法としては片側穿孔とし、研磨においてはヤスリを用いる。古代においては、研磨に砥石を用いていたことが知られている。しかし、体験では、費用や材料の入手しやすさなどの条件よりヤスリを用いる。研磨するという動作に重点をおいた、本質的な追体験であると考える。

(2)「まが玉づくり」の方法

「まが玉づくり」体験は次のように進められる。

> ①はじめのあいさつと金錯銘鉄剣の紹介
> ②まが玉の話
> ③まが玉のつくり方の説明
> ④まが玉づくり
> ・材料に形を写す
> ・紐を通す穴をあける
> ・まが玉の形に荒削りをする
> ・仕上げ磨きをする
> ・管玉と組み合わせて首飾りにする
> ⑤おわりのあいさつ

①では、まず、金錯銘鉄剣や稲荷山古墳の紹介をし、勾玉と埼玉古墳群のつながりを説明する。続いて②において、勾玉とは何かということを参加者と一緒に考えるとともに、古代の勾玉の作り方について説明する。その際、どの過程を取り上げて体験するのかということに触れるようにする。③では、およその作り方を説明し、難しい部分については製作途中で再度説明することを伝える。④では、博物館職員とボランティアスタッフの補助のもとで、参加者が勾玉づくりを行う。製作を終えたら、おわりのあいさつをし、終了とする。

5．博物館で行われている文化体験活動の性格

博物館で行われている文化体験活動の性格について、次のようなことが言えると考える。

① 博物館の体験学習は、博物館の取り扱う分野の中で、それぞれの使命を果たす上で中心となる価値を利用者に伝えるために、製作や演技の一部を取り出して体験するプログラムとしている。

② 時間・場所・費用を適切な範囲で定め、比較的短時間・短期間で体験できるプログラムを設定している。

③ 指導に当たる職員やボランティアスタッフに対して研修を行い、博物館内部で技術の伝承を行っている。

その他、複数回の体験を重ね、参加者が段階的に技術を習得したり、季節に応じた体験ができるプログラムも存在する。さきたま史跡の博物館では、古代米を育てて、精米、炊飯までを年間4回のプログラムで体験する「古代米くらぶ」を行っている。また、「まが玉づくり」では、白色の滑石よりも硬い黒色の滑石でまが玉づくりを行う、上級者向けの案内もしている。しかし、学校教育とは異なり、博物館と利用者との接点は比較的短期間である。博物館の体験学習は、概ね①～③のような性格を有すると言える。

6．おわりに

本稿では、博物館における文化体験学習の性格について考察してきた。全国の博物館で積み重ねられてきた実践を収集し、分析することで、よりよい体験活動を生みだすことができると考える。また、勾玉の製作は、滑石の研磨が活動の中心となる。我が国においては、古来から様々な形で「磨く」という動作が行われてきている。例えば、鏡、土器、水晶、ガラスなどの成形の過程においてである。さまたま古代体験のまが玉づくりを、「磨く」文化の1つとして大きく捉えていくことは、新たな価値を生むと考える。

参考文献

渡邉　勤　1996 「博物館と学校教育の連携」『調査研究報告』 第9号　埼玉県立さきたま資料館
河村　好光　2010 『倭の玉器』 青木書店